

Tutoyer l'épaisseur des cieux

「空の間への近接」

C'est épaisseur des cieux et la dernière étoile convoitée,
C'est au coin de la lune l'oasis de l'infini
C'est liberté nourrissant l'homme, c'est la femme aimée
C'est pour un peuple qui gémit, l'écartement de la broussaille
Pour un qui meurt c'est le silence et la beauté pour un qui vit
Et c'est au cœur le nœud d'eau grise qui épie.

Edouard Glissant. « La Relation », Les Indes, 1955.

マリー・ルプティのデッサン、絵画、インスタレーション等の作品は、生物世界の表情に触れる。コンパス、三角定規や様々な大きさの定規、アーテストは交差し合う線や円の繋がりを細密に線描する。これら無数の点線は一枚の画用紙の紙面、一本のロールになっている長い画用紙、一冊の本、一つの壁、一枚のキャンバスの上にイメージが創造される。

星座のようなコンポジションが紙面や空間の中を支配する。白、黒、グレー、色彩の背景を通して、出現したり消失したりする。ある一つの色の決まりが、作品のイメージの流れによって形をなし、黒、白、グレー、黄、橙、青、ローズの色彩がコンポジションを満たす。点、線、光、色彩の構成が、地図のような形の集合を構成している。解釈の仕方は様々で、作品は我々に科学的で、詩的で、哲学的な考察させてくれる。地形学、天文学、生物学、地理学、さらに、海洋学といった、異なった分野に興味を導いてくれる。陸、海、空は深淵で、摩訶不思議な地図の中に配置される。直感的な地図は逆の事象を呼び起こす。

なぜなら、科学的な事象は、精神世界に近い。具体とは抽象でもあり、又、その反対でもある。彼女は、このように自分の作品のイメージを押し型にしたり、アクリル絵具、木炭、パステルなどの素材で新しいテクスチャーを構成している。

自然界に存在するリズムのように、彼女の作品は、時間の糸、弛まない反復行為によって展開される。マリー・ルプティはエドアール・グリサンが彼の詩の中で言う**« l'épaisseur des cieux » 「空の間」**を探索する。彼女は、新たな領域、手ぶり、視覚的な印象を発見するため、実験をしているのである。そして、不思議な地図の内部に異なった穴、線、点が隠れている。

マリー・ルプティのデッサン作品は、展示空間において、作品と空間を関係付ける。アーティストは、根茎のような構成を散在させるために壁と地面を占める。イメージは、直接壁に、また長い画用紙の紙面に写し出される。そして、まるで北極と南極間のある地点を示しているかのようだ。2つのテリトリーを1つの空間内に表現するために、多数の地図が混成しているその2つを結集させた一つの線のようだ。この果てしないゾーンの中に、我々は、マリー・ルプティのアート作品を通して無限の観念を見出すことができる。

無限という意味において、それぞれの絵画、デッサン作品は、明白な魂を宿している。地面から天井まで、地上から空中まで交差する線や点は「無限」を支配することを試みる。